

## 長崎県地学会の創立に向けて

### 鎌田泰彦先生の長崎県地学会記事第一冊より

昭和36年5月

長崎県の地学研究者を結集する団体の必要を感じ、長崎大学学芸学部地学教室 佐藤教授に鎌田が提案して“地学会”結成の準備を開始する。ご意見を次の3氏に問い合わせたところ、早速返事を得た。

林 徳衛氏 壱岐田河小学校長  
一瀬 亘氏 元大村市教育長、長崎大学助教授（地学）  
石井哲夫氏 長崎大学附属中学校

一瀬 亘氏 からの返事（5月3日付）

お便り有り難く拝見いたしました。御説の地学会実現は大賛成です。どうか出来ます様願います。私も発起人の一員にしていれば幸甚に存じます。必要があればお知らせ下さいませ。末筆ながら先般は博士号授与のこと新聞で拝見しましたのでお祝いに参ろうと思っていました。遅くなりましたがお祝い申し上げます。 五月三日

林 徳衛氏からの返事

拝啓

長崎県地学会 結成の御構想、大いに意を強くいたします。中央的な音頭をとる人がなくて今迄置き去りになっていましたところ一日も早く結成を見、真の研究同心が結合されますことを雀躍を禁じ得ません。六月下旬頃には何とか具体化にもって行きたいものです。夏休みに各位の研究を期待し、秋、フィールドの歩きよい頃、発表会と現地踏査！！といったプランは如何でしょうか。県の研究会につながって多少共補助に得付かるような機構にすることも考えられますが、地学のメンバーは数で圧されるので、押し曲げられるようなことになりたくないし……万事よろしくご高配お願い申します。 頓首

#### 「長崎県地学会」発会のあいさつ

拝啓 初夏の候いよいよ御多祥の事と存じます。

さて 新しい学制に「地学」が本格的に取り入れられて以来、自然科学における地学的関心が次第に高まって来たことは、大変慶ばしい限りです。

地学の内容には、多分に、地方的な特色が濃く、そのいみで、郷土の地質や気象などについての知識が強く要求されます。最近では、特に教職にたずさわる方々よりしばしば地学的教材の取り扱いに、困惑しているとの声も耳にします。また、風水害、地すべりなどの災害や地下や海底資源の開発、土地利用など、我々の身の回りには、絶えず地学で取り扱うべき自然現象や、その利用の話題が新聞紙上を賑わす昨今です。

そこでこの度、新たに、長崎県の未開拓の面の多い地学的自然環境に深い関心を持たれる同好の士が相寄って「長崎県地学会」を結成し、活動を始めることになりました。

本会の運営は別紙会則（案）に盛りられておりますが、是非入会の上、会員相互の理解の上に立って、各人が本会の発展に努めて頂きたいと存じます。なお、知人、友人に御伝達の上ふるって御参加くださいませよう願ひ申し上げます。 敬具

昭和36年6月

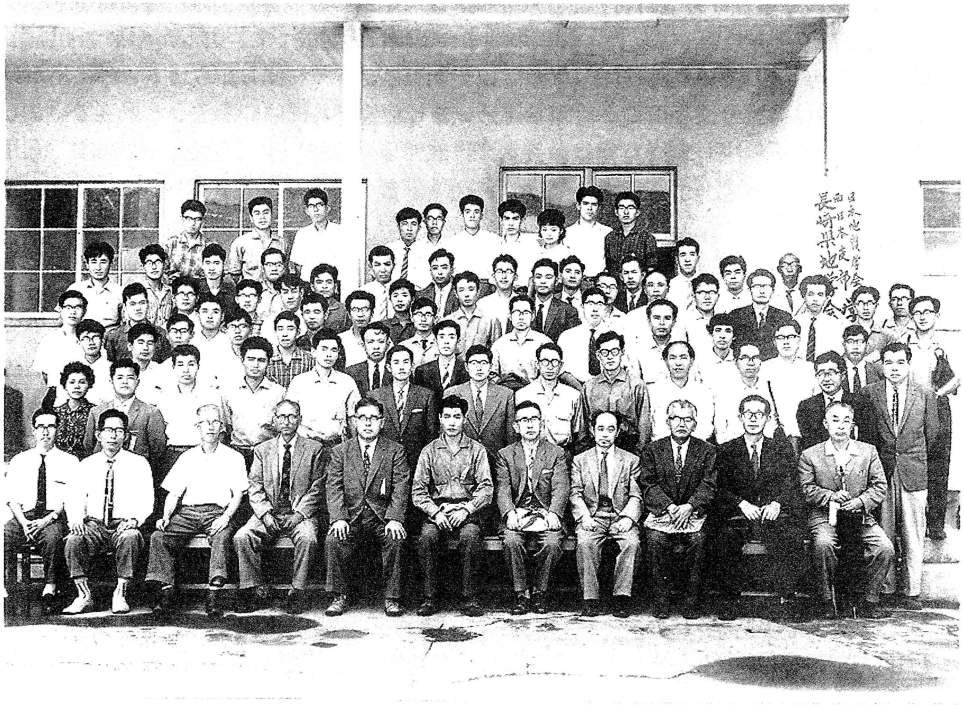
長崎県地学会 発起人一同

殿

発起人 (50音順)

石井 哲夫 (長大附属中学校)  
井上 昌幸 (阿蘇鉱山)  
鎌田 泰彦 (長大 地学教室)  
佐藤 隆夫 (長大 地学教室)  
田口 満 (大島町 第三小学校)  
林 徳衛 (壱岐 田河小学校校長)

一瀬 亘 (元 大村市教育長)  
大塚 裕之 (長大 学芸 地学班)  
小柳 孝夫 (長崎 西浦上中学校)  
橘 行一 (長大 教養部)  
西沢 利男 (外海村 神浦中学校)  
堀口 承明 (長大 地学教室)



日本地質学会西日本支部第36回例会ならびに長崎県地学会創立総会  
昭和36年9月24日 長崎大学学芸学部 出席者80名  
講演会終了後 長崎国際文化会館で懇親会 約45名の参会者

## 長崎県地学会誌第1号 巻頭言

会長 佐藤隆夫\*

昔から本邦においては地学の研究の自由はなかったといっても過言ではない。地中を掘り返して化石を調べ、日本の土地の歴史を探求したり、先住民族の遺した土器や住居を調べ、先祖の起源に科学のメスを入れたりすることは、国体の尊厳を侵すものとされていた。それに加えて、わが長崎県は戦時中に要塞地帯であったために、とくに地学の研究は遅れていたと思われる。しかし戦後は、この二つの桎梏から解放されたことは、科学振興の目的から申しても、また学問研究の基本からいっても慶賀に堪えない所である。かかる欣ばしい時勢にあって、本県においても、地学の研究会が発足したことは大いに意義があると思う。

大抵の学問はそうであるが、特に地学においては、調査資料の集積や手仕事が多い。したがって緻密さと勤勉さを要する点において、極めて日本人向きの学問であると思う。ちょうど、織物工業において日本が世界に冠たると同様に、地学の研究においても日本は優秀なる成果を上げている。よく日本人は金がないから研究は遅れているという社会通念が風靡している。なるほど本邦においては人工衛星をとばし、宇宙旅行なんて話も聞かない。しかし、我々には我々でなければできない事がいくらかもあることを銘記すべきである。

さて、地学の研究は大いに国を愛することにつながると思う。近頃よくいわれる「人づくり」というのは、ちょうど大工が材料を用いて自分の思うままの物を製作するのと似ている。しかし、人の場合には意のままにつくれないだろう。これに反して「人間形成」の方は自分が自由な意欲を持って自らを教育し、人格を形成していくことである。これと同様に、人が他から国を愛する心を養えといわれても、なかなか応ずるものではない。これに反して自らの意欲を持って郷土の地質を調査したり、天文、気象を観測して、自然に親しんでいるうちに、愛情が湧いて来、郷土愛が生じ、更には国を愛するようになると思う。

かかる意味においても、地学愛好者が益々ふえ、この地学会が大いに発展することを希う次第である。

1962年

\* 長崎大学学芸学部教授